

研究ノート

# 南武蔵地域における石製模造品の検討

—野毛古墳群出土資料の分析—

大平 祐実

## 要旨

石製模造品は、古墳時代中期に盛行する祭祀遺物である。古墳から出土する石製模造品は、地域ごとの特徴から、それぞれの首長層の祭祀形態の導入や展開、中央と地方の関係を考察することが可能である。そのため、今後は古墳時代社会の構造に迫る検討が期待される。南武蔵地域の多摩川流域に位置する野毛古墳群の首長墓からは石製模造品が出土しており、同一首長墓系譜内での関係性を検討できる。

そこで、本稿では、同一首長墓系譜で使用される石製模造品の変化を分析することで、古墳時代の地域集団において石製模造品がどのように使用されていたのか検討することを目的とし、野毛大塚古墳、天慶塚古墳、八幡塚古墳出土石製模造品の形態と製作技法の分析を行った。

その結果、野毛大塚古墳第1主体部の段階で畿内から祭祀形態を受容し、第3主体部の段階で正確な技術の伝達がなされ、第2主体部の段階で上毛野地域による影響を受けるといった、生産体制の変化が見出された。一方で、首長墓系譜内で同一の形態を製作する志向性がみられることから、主体的に祭祀を取り入れていたと考えられる。野毛古墳群の祭祀形態には、首長の意向が反映されていたことが読み取れる。

**キーワード：**古墳時代 葬送儀礼 石製模造品 東日本

## はじめに

石製模造品とは、古墳時代中期を中心に認められる、滑石などの軟質石材によって農工具などの器物をかたどった石製品である(図1)。古墳、集落、首長居館、祭祀遺跡から出土し、葬送儀礼と祭祀儀礼に使用された祭祀具であるとされている。器種は主に古墳で使用される刀子形・斧形・鎌形に代表される農工具形のほか、短甲や盾を模倣した武具形、酒造具や機織具などの器物を模したものがあり、その他祭祀遺跡や集落での出土に偏向する鏡を模したものと思われる有孔円板、剣形、勾玉をはじめ白玉などの玉類などがある。4世紀後半頃に初現し、時期が下るごとに小型粗製化し、中期には古墳での同種多量副葬が顕著になっていく(小林1950)。

石製模造品は畿内を発祥とするが、その後は東国を中心に盛行する。出土量が突出する上毛野地域や下総地域では独自の石製模造品祭祀がみられる。

今回研究対象とした南武蔵地域においては、多摩川流域に築造された世田谷区野毛古墳群の主要古墳から石製模造品が出土している。同一首長墓系譜で石製模造品が連続して副葬されることから、石製模造品と首長墓系譜の関連性を捉えることが可能な事例である。

## I. 研究史と課題

### (1) 研究略史

古墳出土石製模造品の基本的な特徴をはじめに提示したのが小林行雄の研究である。小林は石製模造品が畿内



図1 石製模造品形態分類(河野2003)

発祥である点、石材が碧玉製から滑石製に転換する点、時期を下るごとに小型粗製化・多量副葬される点、を見出し、以上の特徴は石製模造品研究の基礎となっていく(小林 1950)。

その後は型式学的な研究が進み、石製模造品の全国的な編年案の検討がなされる。杉山晋作は刀子形を対象に形態分類を試み、編年案を提示した(杉山 1985)。また、白石太一郎は古墳出土品の器種組成の変化や製作の精巧性を根拠に編年案を提示し、集落における祭祀儀礼と古墳の葬送儀礼は別物であると主張する(白石 1985)。河野一隆は農工具形の詳細な形態分類に基づいて編年案を提示し、現在の石製模造品編年の到達点となっている(河野 2002)。

一方で、製作技法に基づいた編年の検討も進む。中井正幸は製作の精巧性を精度指数として数値化し、その結果に基づいて石製模造品祭祀の変化を推定した(中井 1993)。北山峰生は製作段階から農工具形を分類し、時期変遷を検討した(北山 2002)。

近年では、製作技法の分析から、石製模造品の生産体制を導き出そうとする動きがみられる。清喜裕二は、同種多量副葬が認められる群馬県古墳出土例を取り上げ、同一古墳出土品の製作技法の共通点から工人数を推定し、製作体制を検討した(清喜 2014)。佐久間正明は、資料の詳細な観察に基づいて工具痕分析を行った結果、製作工程を提示し、石製模造品の製作構造を体系的に把握した(佐久間 2017)。

また、これまでの発掘調査から、石製模造品の形態や器種組成は地域によって異なることが明らかとなっている。川上真紀子は、東京・群馬・千葉の3地域の古墳出土石製模造品の比較を行った。その結果、地域によって祭祀形態が異なることから、畿内からの規制はなく、地域的主体性があったと考える(川上 1996)。中央と地方の関係については、清喜裕二が奈良県富雄丸山古墳出土資料と茨城県鏡塚古墳出土資料を比較し、首長間交流があった可能性を指摘している(清喜 1994)。

## (2) 課題

石製模造品の型式学的な研究や製作に関する研究は進んでおり、現在その性格は明らかになりつつある。

また、各地域における石製模造品の特徴から、それぞれの首長層の祭祀形態の導入や展開、中央と地方の関係を考察することが可能である。以上を踏まえて、今後は古墳時代社会の構造に迫る検討が期待される。そこで、まずはより狭い同一集団という枠組みでの分析が必要である。

同一首長墓系譜で石製模造品が連続して使用される事例は、福島県郡山市正直古墳群、千葉県多古町多古台古墳群が挙げられる。正直古墳群については、佐久間正明

によって詳細な検討がなされている(佐久間 2023)。しかし、全国的に事例も少ないことから、首長墓系譜についての分析はほとんどなされていない。

今回検討対象とした野毛古墳群は、同一首長墓系譜内で石製模造品が連続して副葬されるため、同一首長墓系譜内での関係性の検討が可能な事例である。そこで、今回は野毛古墳群において石製模造品が出土した野毛大塚古墳、天慶塚古墳、八幡塚古墳の資料を中心に分析を行った。

## II. 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

同一首長墓系譜で使用される石製模造品の変化を分析することで、古墳時代の地域集団において石製模造品がどのように使用されていたのかを検討する。

### (2) 研究対象

南武蔵地域においては、多摩川流域に田園調布古墳群、野毛古墳群が造営される(図2)。首長墓は4世紀後半まで田園調布古墳群に築造されるが、5世紀代に入ると野毛古墳群において野毛大塚古墳が築造され、5世紀後葉の御岳山古墳に至るまで野毛古墳群の首長墓系譜が続く。今回研究対象とするのは、石製模造品が出土した野毛大塚古墳、天慶塚古墳、八幡塚古墳である。

#### 野毛大塚古墳

野毛地域に所在する全長約82mの帆立貝形古墳である。4基の主体部をもち、うち第1主体部(粘土槨+割竹形木棺)、第2主体部(箱形木棺)、第3主体部(箱形石棺)から石製模造品が出土している。

#### 天慶塚古墳

尾山台地域に所在する。全貌は明らかになっていないが、これまでの調査結果から、全長約57mの帆立貝形古墳ないし造出付円墳であると推定される。長持形とみ

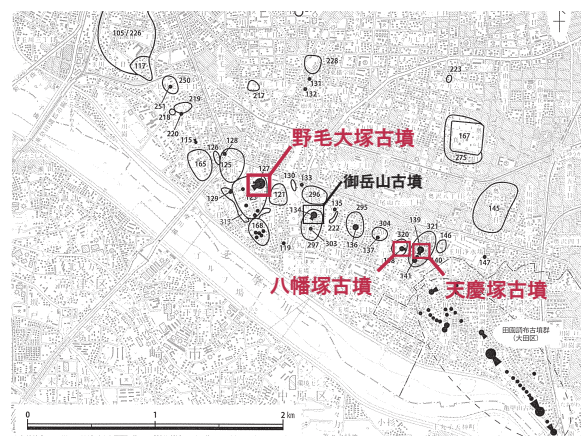


図2 野毛古墳群と周辺の遺跡(寺田ほか 2020 に加筆)



られる石棺片が出土しており、石製模造品は石棺に伴う（寺田 2020）。

八幡塚古墳

尾山台地域に所在する全長約 33 m の造出付円墳である。墳頂部北側から箱形木棺が確認されている。また、墳頂部南西側に箱形石棺が検出されていることから、少なくとも 2 基の主体部をもつ。石製模造品は石棺に伴うものと考えられる。

(3) 研究の方法

野毛大塚古墳、天慶塚古墳、八幡塚古墳出土石製模造品の形態と製作技法の分析を行い、①石製模造品の首長墓系譜との関連性、②石製模造品の生産体制について探る。

古墳ごと（主体部ごと）の詳細な検討はすでに寺田良喜（寺田 1999・2013・2020）、清喜裕二によって行われているため（清喜 1999）、今回は各古墳出土石製模造品の詳細を再確認しつつ、総合的な検討をしていきたい。

Ⅲ. 分析

各古墳から出土した石製模造品を観察し、形態と製作技法の相違点から分類を行った。それぞれ形態分類は河野一隆によって定義付けられた名称を踏襲した（河野 2003）（図 4・5）。

また、製作段階については佐久間正明によって示された製作工程（佐久間 2009）に基づく。本稿では、製作工程を砥石による整形→鉄製工具による整形→仕上げ研磨に分け、完成度の高さから精粗を判断した。

以上のような観察と分類をもとに、各古墳・埋葬施設から出土した石製模造品をグルーピングし、相互関係を考えていく。

年代	野毛古墳群	
	野毛・等々力地域	尾山台地域
TK73	28 ● 上野毛稲荷塚	
	82 ● 野毛大塚第 1 主体部 （割竹形木棺）	
	● 野毛大塚第 3 主体部 （箱形木棺）	
TK216	● 野毛大塚第 2 主体部 （箱形石棺※長持形簡略？）	57 ● 天慶塚古墳 （箱形石棺 ※長持形か）
		33 ● 八幡塚古墳南主体部 （箱形石棺？）
TK208	57 ● 御岳山古墳	
TK23	33 ● 狐塚	● 八幡塚古墳北主体部 （箱形木棺）
		21 ● 尾山北原塚
TK47		

図 3 野毛古墳群主要古墳編年案(寺田 2020 を参考に筆者作成)

前提として、今回対象とした野毛古墳群の編年観を確認する(図 3)。野毛大塚古墳は出土した副葬品によって、第 1 主体部→第 3 主体部→第 2 主体部と変遷することが明らかとなっているため、これに準拠する。天慶塚古墳と八幡塚古墳については、出土遺物が少なく、いまだに不明な点が多いが、野毛大塚古墳第 2 主体部石棺の長持形の形態が、天慶塚古墳出土の石棺より簡略化されていることから、天慶塚古墳は第 2 主体部にやや先行する時期とする。八幡塚古墳については、前述したように、石製模造品は南主体部の石棺から出土したと考えられる。この石棺は長持形の特徴はみられず、野毛大塚第 2 主体部に後出すると判断する。そのため、天慶塚古墳に後続する時期であると捉えた。なお、この変遷観は、既存の研究における石製模造品の変遷観と矛盾しない。

時期が並行する点に関しては、寺田氏の示すように、野毛・等々力地域（野毛大塚古墳→御岳山古墳）の主系列と、尾山台地域（天慶塚古墳→八幡塚古墳）の副系列の 2 系列があったためと考える（寺田 2020）。



写真 1 仕上げ研磨までされた例  
（八幡塚古墳：世田谷区郷土資料館所蔵）



写真 2 砥石整形により擦痕が残る例  
（八幡塚古墳：世田谷区郷土資料館所蔵）

### (1) 野毛大塚古墳第 1 主体部

刀子形 11 点、斧形 5 点、鎌形 2 点、勾玉形 1 点の計 19 点が出土した。

刀子形は鞘入り（1 群）と抜き身（2 群）の二種類に大別される（図 6）。形態は足部の内湾削りがみられる。1 群は鉄製工具によって整形された精製品であるのに対し、2 群は砥石整形の粗製品である。

斧形は短冊形に近いもの（1 群）と有肩斧（2 群）の二種類に大別される（図 7）。2 群は肩部が袈り込まれたいかり肩気味の形態で、いずれも袋部内面の表現を欠く。側面は鉄製工具で削られているが、表面には砥石の擦痕が残る。刀子形 1 群は砥石の擦痕が残らないため、比較すると斧形の製作の方がやや粗製である。

鎌形はいずれも直刃鎌を模したものである（図 8）。砥石の擦痕は残るが、鉄製工具で整形している。

勾玉形も砥石の擦痕は残るが、鉄製工具で整形している。

製作技法が共通する点、刀子形の基本形態が共通する点、斧形の袋部内面の表現を欠く点、錆が付着しており不明瞭であるが、おそらく石材も共通する点が特徴として挙げられる。以上のことから、単一の工房で少数の工人による製作が想定される。野毛古墳群における石製模造品導入段階であり、畿内から新たな祭祀形態を受容し、ある程度正確に製作技法を入手しつつも、一部に変容がみられる。このことから、畿内からの製品の搬入や工人の派遣は考えにくく、在地の工人が在地で製作していたと推測する。

### (2) 野毛大塚古墳第 3 主体部

斧形 10 点、鎌形 4 点の計 14 点が出土した。

斧形は大型品（1 群）と小型品（2 群）に大別され、いずれも有肩斧である（図 7）。清喜によって分析がなされており、穿孔の大きさ、袋部の綴じ目表現、石材などから大型品は A・B 群に、小型品は C～F 群に分類される（清喜 1999）。肩部は屈曲するなで肩といかり肩

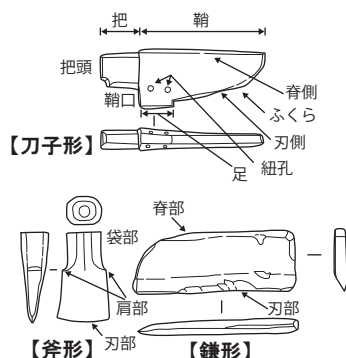


図 4 農工具形石製模造品部位名称（河野 2003 を改変）

が混在する。10 点のうち、擦痕が残り角張った形態のものが 3 点、表面も刀子で削り立体的に丸みを帯びて整形されるものが 7 点であった。工程の多さから、後者の方が精製であるといえる。

鎌形は、直刃鎌と曲刃鎌の 2 群に大別され（図 8）、曲刃鎌は大型品（1 類）と小型品（2 類）に細別される。直刃鎌は折り曲げ表現があり、擦痕がほとんど残らない精製品と、折り曲げ表現を欠き、擦痕の残る粗製品に大別される。曲刃鎌は 2 類にやや擦痕が残るものの、両者とも全体的に鉄製工具で整形されている。

石材が製品によって異なり、形態も第 1 主体部より多様である。また、第 1 主体部の斧形に見られなかった袋部内面の表現が現れ、この段階で石製模造品の表現方法について、普遍的な情報を受容した可能性があると考ええる。

また、斧形 2-D 類と鎌形の穿孔方法が共通しており、器種を越えて工人同士で道具を共有していた可能性が指摘されている（清喜 1999）。

組成に関しては、斧形、鎌形ともに大型品と小型品のセット関係で構成されており、刀子形を欠く。一方、鉄製農工具では、刀子と鎌が出土し、斧が組成に含まれないことから、石製模造品と鉄製農工具の間で、器種を相互補完していた可能性がある（清喜 1999）。

また、斧形 1 点と鎌形 1 点小動物の歯形がついており、千葉市石神 2 号墳出土の立花と同様に、モガリ中にネズミに噛まれた例である可能性が高い。

### (3) 野毛大塚古墳第 2 主体部

刀子形 233 点、鎌形 1 点、斧形 1 点、下駄 1 対、槽 1 点、案 1 点、埴 2 点、坏 3 点、勾玉形 5 点の計 250 点が出土した。

形態分類については、寺田氏が形態と製作技法から精密に分類を行っており、実見の結果相違が無かったため、本稿においても踏襲した（寺田 1999）。

刀子形は、A～L 類の 12 種類に大別され、さらに A～E 群を細別すると 19 種類に分けられる（図 6）。形態の特徴としては、鞘部の突起・ふくら最大、足部の内湾削り・階段削りが確認された。大多数の個体に部分的に

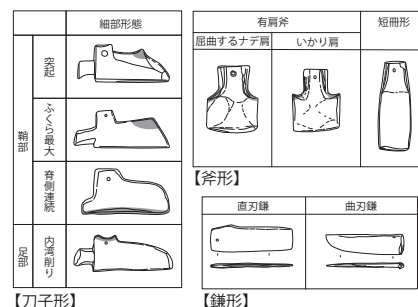


図 5 農工具形石製模造品形態分類（河野 2003 を参考に筆者作成）

砥石による擦痕が残る。

鎌形は直刃鎌で、表面・側面ともに鉄製工具で整形されている(図8)。

斧形は有肩斧で、いかり肩である(図7)。鉄製工具で整形されているが、側面・表面ともに擦痕が残る。

器物形、勾玉形はいずれも鉄製工具で削り出して整形されている。資料の全点の実見は行えていないものの、鉄製工具の削り痕と最終工程の研磨の度合いから、二人の工人による製作という寺田の指摘を首肯できる。

石製模造品の使用量が急増し、刀子形はいずれも全長10cm未満と小型化している。製作技法に関しては擦痕が残るものが多く、鞘部と把部の造り分けを持たないものや、砥石で整形したものが含まれるようになる。まさに石製模造品が小型粗製化し、多量副葬される時期のものであるといえる。

器種組成に下駄などの器物形が含まれる点が、群馬県藤岡市白石稲荷山古墳と共通する。また、第1主体部とは異なる形態の種類が増える。以上を踏まえると、外部からの影響も受けていたと考えられ、特に白石稲荷山古墳との共通点から、上毛野地域との関わりがあった可能性が高い。

#### (4) 天慶塚古墳

刀子形6点が現存し、1～4群に分類される(図6)。

形態の特徴としては足部の内湾削りがみられる。1群のみ鞘部と把部の造り分けを持つ。1群と2群は全体が鉄製工具で整形されており、擦痕は残らない。3群は一部に擦痕が残る。4群は板状で擦痕が残る砥石整形である。

1・2・4群が各1点、3群が3点であった。1群が最も精製であり、石材も他とは異なる。4群は最も粗製で、足部を省略する点が特徴的である。なお、列点文の端部の1点が穿孔されている。鞘部の幅が広い形態は野毛大塚古墳第2主体部刀子形D類の系譜であると考えられており、(寺田 2020)。筆者もこれに同意する。

#### (5) 八幡塚古墳

刀子形9点が確認されているが、うち現存するのは5点である。他4点は写真と実測図から判断した。1～7群に分類される(図6)。形態の特徴としては足部の内湾削り、鞘部の脊側連続表現がみられる。現存していないものも含むが、1～4群は鞘部と把部の造り分けがあると思われる。6・7群は砥石整形で全面に擦痕が残る。

1群と4群が各2点、それ以外は各1点ずつであった。1群は野毛大塚古墳第2主体部E-1群と類似する(寺田 1999)。5群は天慶塚古墳2群と同一の類型であると考えられ1群は大型で精製であるが、5～7群は粗製化が進んでおり、全体的には天慶塚古墳より新しい段階に位置づけられる。

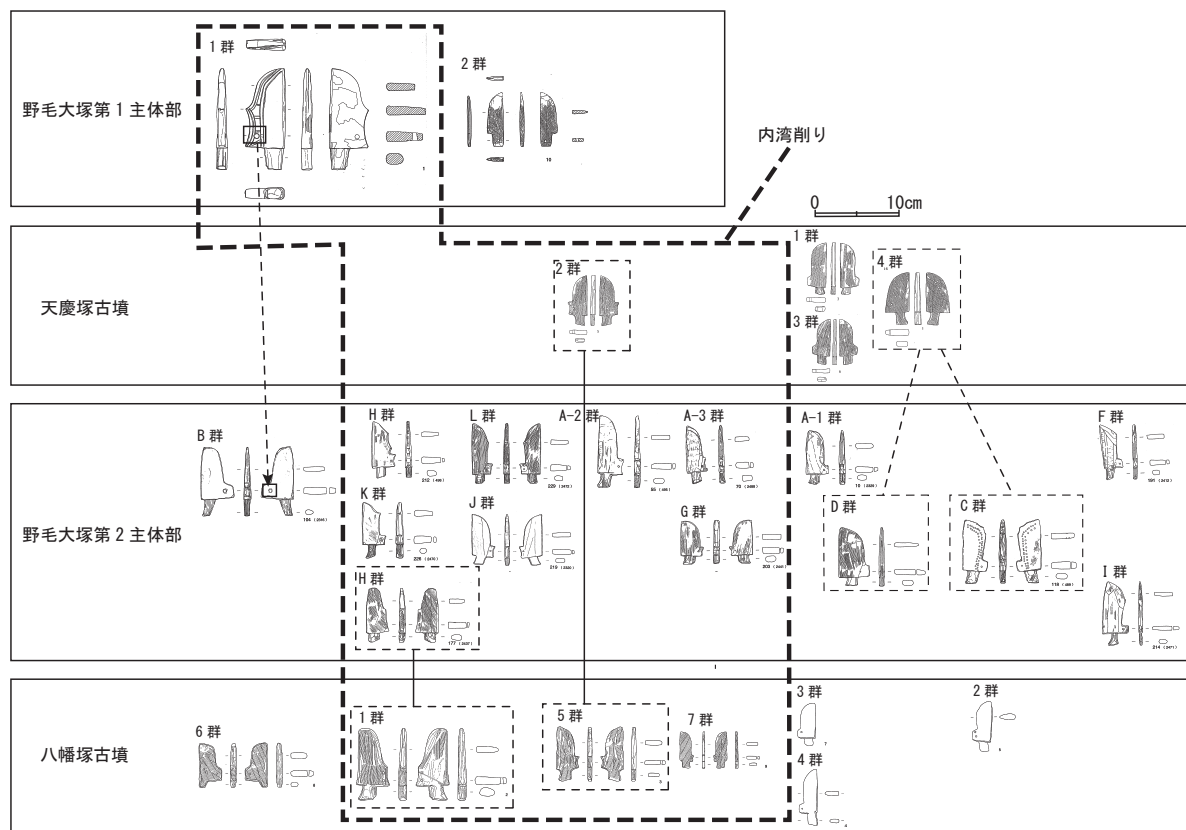


図6 野毛古墳群刀子形変遷(寺田ほか 1999・2013・2020 を元に筆者作成)



## (6) 首長墓系譜の整理

以上、それぞれの古墳から出土した石製模造品について確認した結果を踏まえ、農工具形の古墳・主体部間での共通性を確認する。

刀子形においては、野毛大塚古墳第1主体部で確認された足部内湾削りは八幡塚古墳まで継続し、径の広い穿孔は野毛大塚古墳第2主体部B群と共通する。また、野毛大塚古墳第2主体部B群は八幡塚古墳6群の祖型となる可能性がある。そのほか、野毛大塚古墳第2主体部D類、C類と、天慶塚古墳4群で鞘部の幅が広い形態と列点文の表現が共通する。また、野毛大塚古墳H群と八幡塚古墳I類、天慶塚古墳2群と八幡塚古墳5群の形態がそれぞれ類似している。以上を整理すると図6ようになる。

斧形においては、野毛大塚古墳第1主体部の短冊形に近い形態のものを除くと、第3主体部まですべて有肩斧であり、いずれもややいかり肩の形態が継続する。

鎌形においては、野毛大塚古墳第1主体部から第3主体部まで直刃鎌が継続する。曲刃鎌は第3主体部のみにみられる。

## IV. 考察

古墳間の比較が可能であるのは、3基すべてから出土

している刀子形である。野毛古墳群の石製模造品の特徴として抽出できるのは、①足部の湾曲表現 ②幅の広い鞘部表現の2点である。前者は野毛大塚古墳第1主体部から八幡塚古墳まで継続し、後者は野毛大塚古墳第2主体部・天慶塚古墳・八幡塚古墳で共通して見られる。また、野毛大塚古墳第2主体部と八幡塚、天慶塚古墳と八幡塚古墳で共通する類型がみられることから、首長墓系譜内で同一の形態を製作する志向性があるといえる。つまり、製作技術が工人間で伝承されていたことを示唆する。また、斧形・鎌形についても、野毛大塚古墳第1主体部から第3主体部まで同様のことが言える。

一方、第2主体部における刀子形の類型の急増、器物形の出現については、上毛野地域との交流による影響が考えられる。以上の特徴から、野毛大塚古墳第1主体部から継続する野毛古墳群独自の系譜を継続しつつも、野毛大塚古墳第2主体部の段階で上毛野地域の文化を受容したと捉える。

野毛大塚古墳第1主体部の段階では、少数の工人によって製作されていたと思われるが、第2主体部の段階になると刀子形の多量副葬に伴い、大人数の工人によって製作されるようになる。また、第1主体部では斧形の袋部表現がなかったが、第3主体部では袋部の表現が見られることから、この段階で改めて正確な技術が伝わった可能性がある。先にも述べたが、第1主体部の段階で畿内からの祭祀形態の受容があり、第3主体部の段階で

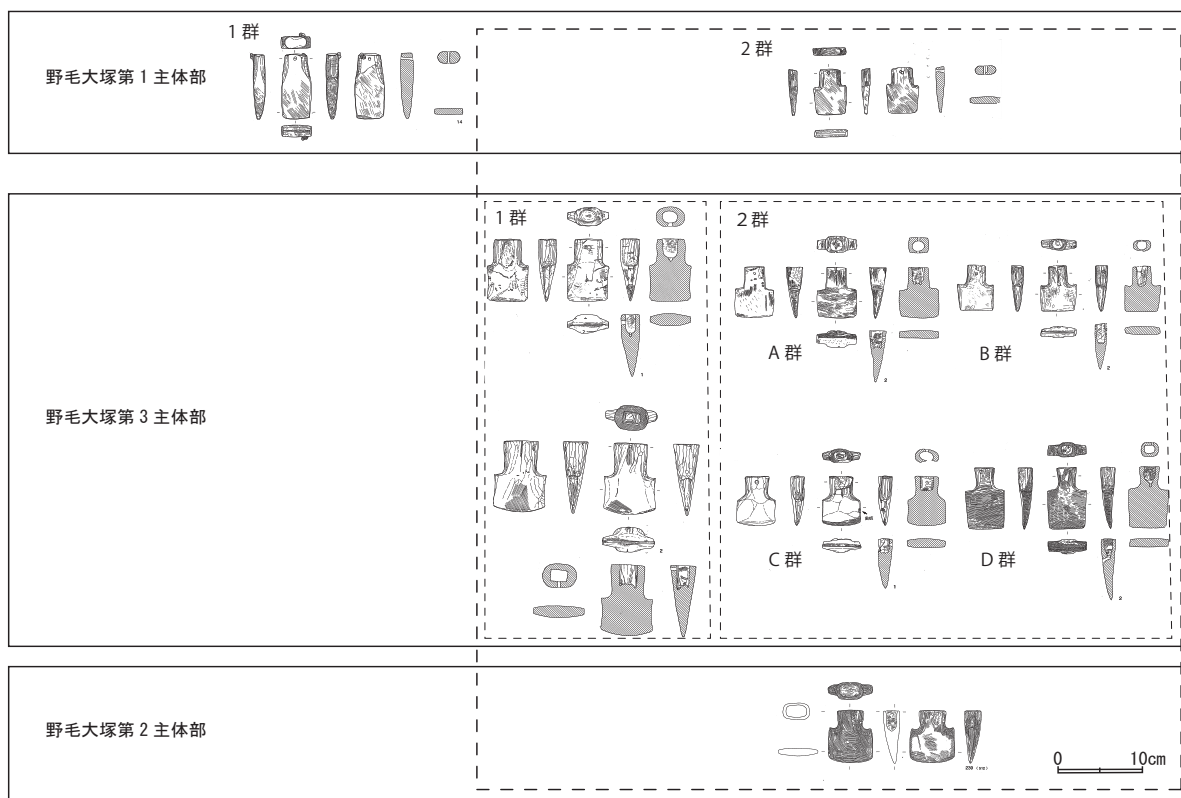


図7 野毛古墳群斧形変遷（寺田ほか 1999 を元に筆者作成）

正確な技術の伝達、第 2 主体部の段階で上毛野地域による影響を受けたと推測する。八幡塚古墳に続く御岳山古墳では石製模造品が副葬されず、南武蔵地域での石製模造品の使用は比較的短期間であった。

以上のような祭祀形態の変化から、南武蔵の首長は、中央や上毛野政権の影響を受けていたといえる。一方で、南武蔵独自の石製模造品の特徴が継続するという点からは、他地域からの制約を受けていたわけではなく、主体的に祭祀を導入していたと考えられる。石製模造品は、在地で生産されていたと推定されるため、鏡や武器・武具などといったほかの副葬品と比較して、首長の意向が反映されやすいものであった可能性が高い。野毛古墳群における石製模造品の変遷は、そのような石製模造品の性格を示唆するものであった。

## V. 今後の展望と課題

野毛古墳群においては、首長間関係の変化や、首長墓系譜での志向性を確認することができた。しかし、野毛大塚古墳第 2 主体部に工房数が増加する段階においては、南武蔵地域と上毛野地域間での工人の動向を明確にするには至らなかったため、同時期の上毛野地域の資料と比較し、さらなる分析が必要である。

また、形態への志向性が集団ごとに異なる可能性があるため、他の古墳群における検討が求められる。

## おわりに

同一首長墓系譜を対象とした石製模造品の検討は事例があまり多くないため、本稿の検討は意義のあるものであったといえる。今回の課題を踏まえ、今後はさらなる詳細な分析と地域を広げた検討を重ねていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、東京国立博物館、京都大学総合博物館、世田谷区立郷土資料館には資料の実見でお世話になりました。また、利根川章彦氏、富田樹氏、寺西良騎氏らにご助言、ご協力いただきました。末筆ながらお礼申し上げます。

## 参考文献

- 川上真紀子 1996 「古墳出土の石製模造品と地域性」『考古学  
と遺跡の保護』、pp.273-286、甘粕健先生退官記念論集刊行  
会  
河野一隆 2002 「石製模造品」北條芳隆・禰宜田佳男（編）『考  
古資料大観』第 9 巻、p.331-340、小学館  
河野一隆 2003 「石製模造品の編年と儀礼の展開」『帝京大学  
山梨文化財研究所研究報告』第 11 集、pp.15-17、帝京大学  
山梨文化財研究所  
北山峰生 2002 「石製模造品副葬の動向とその意義」『古代学  
研究』158 号、pp.16-36、古代学研究会  
小林行雄 1950 「古墳時代における文化の傳播（上）」『史林』  
第 33 巻、3 号、pp.304-316、史学研究会

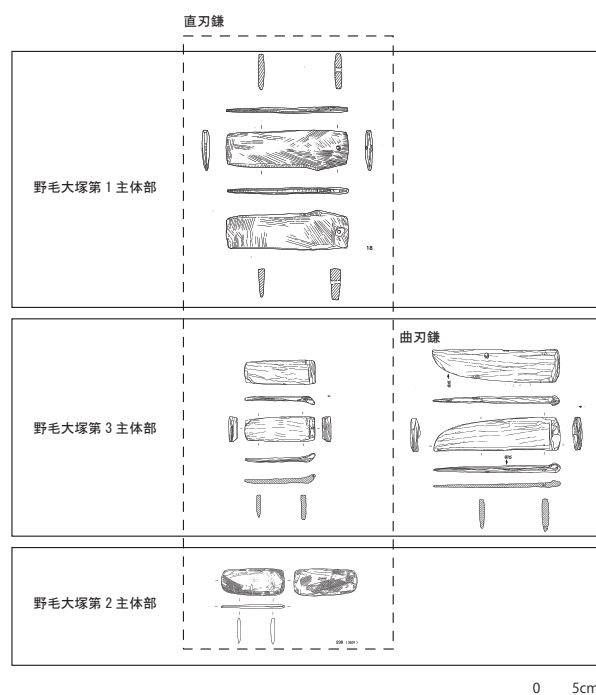


図 8 野毛古墳群鎌形変遷（寺田ほか 1999 を元に筆者作成）

佐久間正明 2009 「東国における石製模造品の展開－刀子形の製作を中心に－」『日本考古学第 27 号』、pp.21-55、日本考古学会  
 佐久間正明 2017 『石製模造品から見た古墳時代の葬送と祭祀』佐久間正明博士論文、東北大学  
 佐久間正明 2023 『シリーズ「遺跡を学ぶ」161 石製模造品による葬送と祭祀 正直古墳群』新泉社  
 白石太一郎 1985 「神まつりと古墳の祭祀－古墳出土の石製模造品を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集、pp.79-114、国立歴史民俗博物館  
 杉山晋作 1985 「石製刀子とその使途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集、pp.115-133、国立歴史民俗博物館  
 清喜裕二 2014 「古墳出土石製模造品の製作者と工房について－群馬県古墳出土例から－」『古墳出土品がうつし出す工房の風景－手工業生産の実像に迫る－』大阪大谷大学博物館報告書 第 61 冊、pp.28-45、大阪大谷大学博物館

中井正幸 1993 「古墳出土の石製祭器－滑石製農具を中心として－」『考古学雑誌』第 79 巻第 2 号、pp.31-61、日本考古学会

#### 報告書

櫻井清彦・甘粕健・寺田良喜・小泉玲子・水野敏典・風間栄一・橋本達也・清喜裕二・大西雅也・池田美緒・加納由美・久住猛雄・三浦淑子（編）1999 『野毛大塚古墳－東京都世田谷区野毛 1 丁目所在の古墳保存整備・発掘調査記録－』世田谷区教育委員会  
 寺田良喜・半田素子・大野節子（編）2013 『八幡塚古墳－東京都世田谷区尾山台二丁目 11 番所在の古墳発掘調査記録－』世田谷区教育委員会  
 寺田良喜（編）2020 『天慶塚古墳 I ・寮の坂東遺跡 II －東京都世田谷区尾山台二丁目 14 番の発掘調査記録－』世田谷区教育委員会

## A Study of Stone Models in the Southern Musashi Region of Eastern Japan: With Special Reference to Artifacts Excavated in the Noge Mounded Tomb Group

ODAIRA Yumi

Stone models of various objects such as knives, mirrors, etc. are ritual objects that flourished in the Middle Kofun period or the fifth century CE. These stone models are normally deposited with the dead in elite mounded tombs or kofun. Research into the stone models is useful for interpretation of interaction among local elites, based on the identification of which objects they were modelled after, as well as their morphologies and spatial distribution. In this paper, the author adopts this research to approach the possible relationship among elites of different generations of a single lineage. For this purpose, the author investigates the morphologies and production techniques as well as their temporal changes of stone models excavated at three mounded tombs of the Noge mounded tomb group located in the Tama River basin in the southern Musashi area (present Tokyo Metropolitan Prefecture), namely Noge-Ôtsuka, Tengyō-zuka, and Hachiman-zuka.

As a result, the author has identified three successive stages of the adoption and adaptation of stone models in the Noge group: 1) funeral rites utilizing stone models diffused from the central Kinki region where the central polity was located when the first burial chamber of the Noge-Ôtsuka was installed; 2) the accurate techniques of the stone model production was adopted when the second earliest burial chamber of the Noge-Ôtsuka was installed; and 3) the production technique of stone models came to be under the influence of the Kamitsukeno region when the latest burial chamber was installed. At the same time, it is evident that the intention to produce stone models of the same morphologies from a generation to generation. The author concludes that the chiefs of southern Musashi maintained some degree of autonomy while being influenced by other regions. Regarding the temporal changes in production techniques, the author observes evolution from fine to crude techniques.

#### KEY WORDS:

**Kofun period of protohistoric Japan, funeral rites, stone models, Eastern Japan.**